

題 名 『片道切符』

元作品 蜜柑（芥川龍之介）

著者名 アズミハヤセ

あらすじ

遠方の老人施設に入居する祖母を車で送り届けるという後ろ向きの役割を押しつけられた瑞希は、黙って運命に従う祖母に自らの姿を重ねてイライラを募らせる。しかし、今は亡き祖父が一緒だからどこにいても大丈夫なのだという祖母の言葉に、人との出会いの大切さを知るようになる。

文字数 4, 974文字

「どうして、私が送って行かなきゃならないのよ。まったく！」

高速道路の登坂車線に差しかかり、急激にスピードの落ちた車のアクセルを目一杯踏み込みながら、瑞希は不満を口にした。

あっと思い、助手席に目をやったが、耳の遠い祖母には聞こえなかったようだ。歯ざしりのようなエンジン音が不適切な言葉をかき消してくれたのだろう。

助手席の祖母は、きちんと閉じられた膝の上の小さな風呂敷包みを、狭い肩幅を更に縮めるようにして、大事そうに抱えたままじっと前を見詰めている。小柄な祖母の目に今何が映っているのかはよく分からない。

膝の上の荷物は後ろに置くように再三言ったのだが、手放そうとはしなかった。

そもそも、祖母が助手席に座っていること自体が予想外だった。促すまでもなく、後部座席に乗り込み、道中ゆっくり寝ていてくれるものとばかり思っていた。仮に起きていたとしても、ルームミラーで様子を確認しながら時折声をかけるぐらいで済ませるつもりだった。

それなのに、なぜ助手席に……。

間違った座席番号に座って平然としている乗客を隣にしたような、居心地の悪さを覚えた。

視界が陰ったので前方に注意を向けると、遠くに見えていた山々が、いつの間にか人の目線を引き上げるまで距離を詰めてきているのが分かった。

抹茶の茶溜まりのような濃い緑色でベタ塗りされた山々には、重い灰色の雲が垂れこめており、気象予報の何倍もの正確さで、この先は雨になることをドライバーに示していた。何とか持ちこたえてくれないだろうか。

半ば祈るような願いを足蹴にするように、フロントガラスに露払いの水滴がぼつぼつと当たって流れていった。

瑞希はため息をつき、指先でワイパーのレバーを押し上げた。惰眠から叩き起こされたワイパーが、ぶつくさ言いながらフロントガラスの上を一度だけ滑った。

助手席の祖母が息をついたのが分かった。突然動いたワイパーに驚いたのだろう。そんなことでビクつくなら最初から助手席に乗るなよと、心の中で悪態をついていたら、祖母と同じ空間にいることが厭わしくなってきた。

祖母が羽織っているカーディガンの毛玉も、膝の上の使い古された風呂敷包みも、踵のすり減った黒い靴も、それらを乗せて走らなければならない自分の運命も、全てが瑞希の神経を逆撫でした。

どうしようもなく湧き上がってくる苛立ちを、祖母に悟られないように抑え込むのが大変だった。瑞希は奥歯を噛み締め、汗に湿ったハンドルを強く握った。

「ああ、ほーれ、あそこに」

祖母の間延びしたような声に、瑞希のせり上がっていた肩から力が抜けた。

「あれは、田舎に行く線路だなあ」

祖母の頭を避けながら助手席側に目をやると、高速道路の下の谷間に在来線の線路が並行しているのが見えた。その路線の特急列車に乗れば、祖母の生まれ育った山間の村に2時間ちょっとで行くことができる。

「昔は、蒸気だったよ。瑞希は知らんよな」

祖母が瑞希の名前を正しく口にすることに驚いた。一瞬、誰のことかと戸惑うぐらいの新鮮さがあった。

「スイッチバックと言ってなあ、前を向いていたと思ったら、後ろ向きに走るんだわ」

父からも同じ話を聞いたことがあった。スイッチバックというカタカナは祖母の口から出たのではなく、父の声で聞こえたような気がした。

祖母は窓の外に顔を向けたまま、独り言のように話しをしている。瑞希は祖母の回想を邪魔しないように、「うん」とだけ答えておいた。

「もうすぐトンネルだら」

トンネル？

行く手に目を凝らすと、高速度道路がカーブした先に、この路線でも1、2の長さを争うトンネルの入り口が小さく見えていた。祖母が見下ろしている線路も同様にトンネルに向かうはずだ。

すごい記憶力だなと、祖母の丸い背中に目を剥いた。歳をとると、新しい記憶はあやふやなのに遠い昔の記憶は鮮明に蘇ってくるものなのだろうか。

祖母が口を開いたのを機に何か話題を差し向けるべきか迷っているうちに、車はトンネルに入り込み、反響音が押し寄せると共に耳に圧力を感じた。

トンネルの中では誰もが口をつぐむという経験則があるので、瑞希はほっとした。

トンネルに入る前の電光掲示に、『出口付近晴れ、風に注意』との知らせが流れていた。幾つも山を越えるこの長いトンネルでは、入り口と出口の天候の違いはよくあることだ。

青白い照明灯が次々に飛び去る中を、かなり前を行く車のテールランプを凝視しながら、瑞希は前かがみになって車を走らせた。

首筋に凝りを感じ始めたころ、今トンネルの全長のどのあたりを走っているのだろうか、ナビの画面を目の端で捉えようとしたら、「食べな」と予想もしなかった言葉が耳に届いたので、思わずブレーキを踏みそうになった。

「ほれ、食べな」

いつの間にか風呂敷包みを開いた祖母は、中から取り出したおにぎりをこちらに向かって差し出していた。皺くれた手に乗ったおにぎりは、トンネルの白い蟻のような光の中で見ると、色の悪い食品サンプルみたいで全く食欲を掻き立てなかった。

「いらないから」

瑞希は苛立ちを隠そうともせず、祖母に棘を向けた。

見れば分かりそうなものだ。今手を離せる状況かどうか。なのに、有無も言わさぬ命令口調で善意を押しつけようとする。解いた風呂敷の中に祖父の位牌があるのがチラッと見えた。位牌とおにぎりを一緒に包むなんて、あまりにも無神経過する。そんなもの、食べる気にもならない。

「食べたければ、自分だけ食べなよ」

祖母は「ああ」と肯定とも落胆ともつかない言葉を発し、ラップに包まれたおにぎりを元に戻した。

再び車内に無言の時は流れた。

祖母と二人きりになることなど、これまでになかったと思う。

祖母の家に家族で遊びに行っても、相手になって笑ってくれたのは祖父であり、祖母は常に台所に立っている後姿のイメージしか記憶に残っていない。

祖父が亡くなると、徐々に足が遠のいた。行こうと思えば、すぐに行ける距離だったのに。

声を忘れてしまいそうになるほど無口で、何をすることも受け身。柔和そうな顔の裏で常に何かを我慢している。そんな祖母が、瑞希は何となく不得意だった。

鏡に映る自分の姿を見せられているようで、気が滅入ってしまう。

そんな後ろ向きの感情は、きっと祖母にも伝わっているはずだと思っていた。それなのに、なぜ助手席に……。

考えれば考えるほど頭の中でぐるぐると回ってしまう負の連想の輪を、サクッと断ち切るように、前方にトンネルの出口の光が見えてきた。

それは全てのドライバーに閉塞感からの脱出を確約する突破口として、強く一途な輝きを放って開かれていた。

助手席で祖母が身動きをする衣擦れの音がしたので、ふと視線を送ると、こち

らに背を向けた祖母が窓の下の辺りをごそごと探っているのが分かった。

あ、待って、ちょっと、ちょっと、今、開けちゃダメ！

祖母の意図を察した瑞希の声をかき消すように、音をたてて下がる助手席の窓から、排気ガスの油っぽい匂いを含んだ空気が入り込み、室内に充満した。トンネルの出口を目前にした瑞希は、窓を閉めるスイッチに手をやることもままならず、ただハンドルを握り締めていた。

『トンネル出口、風に注意』

出口に差しかかると、車を締め付けていた圧力からドンと解放され、目の眩むような光に包まれた。同時に、車内の汚れた空気が吸い出され、一瞬にして新鮮な空気に入れ替わった。車も安定して、緩やかな下り坂を走っていく。

「田舎の匂い」

助手席の祖母は窓の外に向かって深呼吸をしているようだった。

確かに、緑の瑞々しい香りに、畑の乾いた土塊の香り、牛舎の滋養を含んだ香り、そんなものが入り混じったどこか懐かしさを感じる香りがするような気がした。

恐らく祖母は、昔の汽車を思い出しながら、トンネルに入るときに閉めた窓はトンネルを抜けたら開け放つという習慣に従ったのだろう。

瑞希は祖母に注意を向けながら、助手席の窓を閉めた。

「お父さんとは、結婚が決まってから、東京で、初めて会った」祖母は誰に聞かせるでもなく、祖父との馴れ初めを口にした。

「嫌も何もないわ。ただ、やけに顔の四角い人だなんて……」そこで祖母は抱えている風呂敷包みを、そっと撫でた。「田舎へ帰りたくて帰りたくてなあ。ほんでも、気がつきゃあ、何十年もたっとった」

どんな出会いだろうが、出会えただけいいじゃないか。自分には出会いの香りすらない。瑞希は風呂敷包みを抱えることのできる祖母を羨ましく思った。位牌となった自分は、いったい誰に抱えられるのだろうか。

広大な盆地を突っ切るように走る車は、祖母の故郷を疾うに過ぎ、ひたすら西に向かって走り続けた。さすがの祖母も眠くなったのか、黙って目を閉じている。

祖母の実家から遠ざかるにつれ、今日の行き先を祖母は本当に認識しているのだろうかという疑問がふと頭をよぎった。しかも、手にしているのは片道切符。

しかし、そんな心配を気にかける間もなく、ナビが人の注意をもぎ取るように高速道路の出口を知らせてきたので、瑞希はスピードを緩めてインターチェンジを下り、山間部へと入り込む県道に車を向かわせた。

手入れのされていない鬱蒼とした雑木林の中を、道路の別れ道を探しながら注意深く車を進めていくと、訪問者を目的地に誘導する看板が見落としのような派手な矢印と共に姿を現した。

『やすらぎ苑』

葬儀場みたいな名前だなと思い、この場所を選んだ父や母のセンスを疑った。

両側を木々に囲まれた見通しの悪い進入路を、ゆっくりと進む。そして、それが本当に正しい道なのか少し不安になってきた頃、唐突に視界がひらけ、そこが施設の入り口であることを示す門が姿を現した。

開け放たれた門の先には、パンフレットの宣伝文句をそのまま形にしたように作り込まれた美しい空間が広がっていた。「地上の楽園」という言葉が頭に浮かんだ。

自然界との境界線を跨ぐように車を進め、舗装された駐車場に車を止めた。降りて辺りを見回す。

ホテルのような建物の先によく手入れされた庭園が見えた。花壇を巡る散策路があり、小さな築山まである。所々にはベンチも置かれている。しかし、穏やかな天気であるにもかかわらず、そこには人の姿がなかった。

来客用の広い駐車場に他の車はなく、歩いている人や作業をしている人も見当たらない。建物の窓にはレースのカーテンが引かれていて、人の影は見えなかった。

鑑賞用の箱庭のように、生きている人の気配が全く感じられなかった。ふと息苦しくなり、自分自身が息を止めていたことに気づいた。

車の反対側に立って建物を見上げている祖母に、瑞希は声をかけた。

「帰ろう」少しでも早くこの場を離れたと思ったのは瑞希自身だった。

「おばあちゃん。一緒に家に帰ろう」

それがいい。祖母をこのまま車に乗せて帰ったら、両親はさぞかし驚くことだろう。困り切った顔が目に見えよう。

祖母が車を離れ、瑞希の視線の先で立ち止まった。両方の腕で風呂敷包みをつかっている。

「もう、ここで大丈夫。お父さんが一緒だから、大丈夫」

祖母は何度か頷くと、こちらに背を向けて、ひとりで歩き出した。

まるで自分自身の運命が共に遠ざかっていくように、瑞希には思えた。

「おばあちゃん！」

瑞希が駆け寄りながら呼びかけると、祖母は足を止め、「ああ」と声を上げた。

「忘れるところだったよ」

祖母が風呂敷包みから取り出したのは、まあいいおにぎりだった。

トンネルの中で見たのと違い、穀物を育んできた自然光に照らされたおにぎりは、コメのひと粒ひと粒が瑞々しく輝いていた。

祖母が朝早く起きて握ってくれたのであろうおにぎりを、瑞希は両手で受け取った。思いを繋ぐバトンでも渡されたような気分になった。

祖母は安心したように風呂敷包みを持ち直すと、「ありがとう」と丁寧に頭を下げて、再び歩き始めた。

祖母の歩みに、ためらいはなかった。

『一緒だから大丈夫』

一度も振り返らずに真っすぐ歩いていくその後姿を見詰めていたら、祖母はいい出会いをしたんだなど、瑞希は胸に温かさを感じながら納得ができた。

私は、どうなることやら……。瑞希は見えない先を訝しがりながらも、ふと微笑んでいる自分に気づいた。

建物の自動ドアが閉まるまで祖母を見送った瑞希が車のドアに手をかけると、お腹がグーと間延びした音をたてて空腹を知らせた。